

静岡市における医療施設の立地

吉 住 理恵子

医療は人間が健康的な生活を送っていくために必要な最も基本的なサービスである。日本は医師の自由開業制と国民の自由選択、そして医療費の社会保険による保証という制度的な基盤と、医療技術の進歩、経済力の向上、制度の整備がすすめられ、世界的にも健康水準は高いグループに属するようになった。しかし、社会状況や疾病構造の変化にともない医療をめぐる様々な問題が生じてきている。そういった問題のひとつに、医療施設の地域的偏在があり、全国的なレベルから同一市町村レベルにいたるまで、その地域内に住む人が受けることのできる医療サービスに格差が生じる原因となっている。本論文においては、静岡市における医療施設の立地を論じることによって、医療の地理的不平等についての問題を探ることを目的としている。

静岡県は暖かな気候と、豊かな自然条件に恵まれており、健康水準は全国的にみても高い方であるが、医療施設や医療従事者等の資源の量は少ない。また、国立・公的病院の占める割合が大きいのが特徴であり、県庁所在地である静岡市ではその傾向が特に顕著である。静岡市には病床規模の大きな総合病院が多く所在している為、静岡県東部から中部にかけての周辺市町村から、広く患者が流入してきており、また県内全域を対象とした医療サービスを提供する高度専門病院が立地していることもあって、静岡市は医療活動においても静岡市の中心都市としての機能をはたしている。

静岡市内部での医療施設の立地状況をみていくと、まず広範囲から患者が来院する総合病院の場合には、来院患者の総コストが最小化するようなJR東海道線静岡駅に近い市の中心部に多く立地しているが、病院の大規模化や高度専門化が進んでいく中であって、新しく開設する病院の場合は立地に変化がおこっている。また、総合病院以外の病院で病床規模がそれ程大きくないものは、静岡鉄道の新静岡駅周辺に施設が集積している。診

療所の分布は、主に医療活動の主体が診療所であった頃の昭和初期から中期にかけて形成された住宅地の分布とほぼ一致しているように見受けられる。病床数を見ると、静岡市の場合には病院病床の占める割合が大きい為、人口との相関において医療活動が特化している地域は病院の所在に大きく影響される。また、専門性の高い診療科目ほど地域的偏在の度合いが大きく、その立地にはコストの最小化の考え方が支配的である。

総じて言えば、安倍川河岸やJR静岡駅南部をはじめとする郊外地域で宅地化が進んでおり、人口も増加しているのに対し、医療施設の不備がめだち、都市化にともなう人口の動きに医療施設の立地が対応しきれておらず、人口との相関を薄いものにしていく。ただし、医療施設は人口に比例配分して分布していればよいというわけではなく、提供できる医療サービスの性格やレベルに応じて立地がなされる必要があり、問題は容易ではない。

こうした問題を解決していくために、静岡県では医療行政の立場で、静岡県地域保健医療計画を策定し、医療圏構想を柱とした改善に努めている。この計画の中で、静岡市域全体が2次医療圏の静岡圏域として定められており、圏域内の医療施設相互の連携を強める等、段階的かつ包括的な医療供給体制の整備がはかれることが、望まれている。

こうした施設の地域的偏在の問題以外にも、患者側に大病院指向が高まり、また、それを可能にするような交通機関の発達や来院手段の多様化によって需要構造も変化してきたこと、医師の側にも専門医としての勤務医指向が高まる中、診療所医師の後継者不足や開業医の高齢化が問題となっていること等、医療をめぐる様々な課題が残されている。私たちが生活していく上で、最も切実な問題であるだけに、一刻もはやくこれらの問題が解決され、社会状況にそくした医療供給体制が整備されることが望まれる。